

リーディング指導における文脈の問題

広島大学大学院 柳 井 智 彦

1. はじめに：文脈とは何か

どらが鳴りわたった。弟とわたしは、思いきって戸をあけた。この土地をめざして、世界のたんけん家たちは、いく度も航海を試みた。聞き手には、話し手の表情や身ぶり・手ぶりが見えない。そろそろ1年になるが、自分ながらよく続けたものだと思う。ところが大問題になった。目がさめたら雨の音がしていた。船は、しだいに速力を加える。

(⑦：7)

これは『文脈指導』という国語教育の書物に出ている例文であるが、いわゆる文脈がなく意味が通じない文章であることに気がつく。実はこの例は国語の教科書の中から任意の文をひろいあげてでたらめに並べたものだという。文脈とは何かというのは大きな問題でありここでは詳論は避けるが、おおよそ、語と語、文と文、段落と段落などの間にみられるつながり、文章としてのスジであろうと思われる^(注1)。

文脈は当然ながら英語の文章にも存在するはずであり、リーディングの学習において、訳せても文と文とがどのような関連をもつかわからないとか、話のスジがつかめないというようなことは、文脈の把握と少なからず関係しているといえよう。文脈の理解がリーディングの際の1つの鍵になっていることは、『英語指導法ハンドブック ②教授類型編』(④：130-158, 248-275)が理解のための大きな指導目標に、「語の理解」、「文の理解」とともに「文と文のつながりの理解」や「パラグラフ(や文章全体)の理解」など、文脈と関連してくる項目をあげていることから推測できる。パラグラフリーディングは別の機会に譲ることにして、本稿では「文と文のつながりの理解」ということに焦点をあてて文脈の問題を論じてみたい。

2. 文脈指導と言語学、文体論

前にあげた『英語指導法ハンドブック ②授業類型編』の中の1セクション、「文と文のつながりの理解」(④：262-269)を文脈指導の1例だと仮定すると、そこに掲げてある7つの具体的指導目標は文脈指導上の留意点でもありと考えられる。ところでこれら7つのほとんどは、また言語学(特に discourse analysis)、文体論上の関心事でもあることが次の表によってわかるであろう。すなわち、個々の文を孤立したものとして取り扱わず、文章全体の流れの中で理解するというアプローチは、言語学、文体論でも注目を集めるようになってきており、英語教育においても今後、研究の余地のある領域ではないかと思われる。

〔言語学, 文体論と文脈指導の関連〕

文脈指導 『英語指導法ハンドブック ②』(1978)	言語学 Van Dijk (1977)	文体論 Chapman (1973)
代名詞をさすものを突きとめさせる	pronominalization	pronominal linkage
定冠詞などの限定するものを究める	article selection	deictic words
名詞が別の名詞で受けつがれていく場合をつかませる	contextually identified individuals	use of synonymous or related word or phrase
another, other, else などが何に照応するものかをつかませる	_____	_____
連結の働きをする副詞をつかませる	connectives	conjunctions and conjunctive adjectives
連結語句がない場合の文と文の関係をつかませる	asyndetic sequences	_____
2つの文が関係を持つ点, それがどう展開しているのかをつかませる	ordering	class-member relationship

3. 「文と文のつながり」を形成する要因

上記の表からも推察できるように, 「文と文のつながり」を形成しているものは次の2つの要因に大別できるように思われる。それらは, A 指示的要因, B 配列的要因とでも呼ぶべきものである。

A 指示的要因

これは,

- (1) 定冠詞や他の限定辞
- (2) 先行する内容を受ける this, that など
- (3) 代名詞
- (4) 同一人物, 事物を代名詞以外の表現で表わすもの

などの要素が, 文と文の間に何らかの cohesion (意味的つながり) を持たせている場合である。

この現象は言語学では topic-comment structure と呼ばれて研究されているが (②: 114),

topic とは古い情報, 先行する文章ですでに導入されている情報を指し, comment とは新しい情報, 新しく導入される情報を指す^(注2)。以下の例文において, 下線を施した部分は古い情報だといえるが, 指導の際には定冠詞や代名詞などの文法的特徴とともに, 音読する時は古い情報にはストレスが置かれられないということにも注意を向けさせるべきであろう。

There is a beautiful city in the western part of the United States. It is called Salt Lake City. The name comes from a great salt lake near by. The city lies in a valley with high mountains all around it.

(New Horizon English Readers 1, p. 24)

B 配列的要因

これは文(節)の並べ方から生まれる文脈であるが、それには、

- (1) 時間的配列
- (2) 論理的配列

の2種類が考えられる。

(1) 時間的配列

文(節)の表現する出来事には、相互に時間的前後関係のある場合がある。この関係は時制の変化、時を表わす副詞(句)によって表現される。次の例^(注3)によって時間的配列と読み易さの関係を考察したい。

- (a) He began to tell the story. Previously he had turned off the radio and had closed the window.
- (b) He began to tell the story after he had turned off the radio and had closed the window.
- (c) He turned off the radio before he closed the window and began to tell the story.
- (d) He turned off the radio, closed the window and began to tell the story.

(d)は行動が時間の経過に従って線形的に述べられており、最も普通の記述の仕方であろう。(a), (b), (c), (d)と同じ内容であるのだが、previously, after, before という語句を用いたため記述の仕方が異なっている。ところでこれらの文例は(d)と比べて生徒がより理解しにくいものではないだろうか。特に(a)や(b)には過去完了形が現われており、いっそう複雑なものとなっている。このような文の指導にあたっては、出来事の時間的継起をチェックすることとともに、場合によっては(d)のような文に書き換えてやる配慮も必要となるだろう。また、時間的順序を表わす接続詞、副詞などの理解も徹底させておかねばならないと思う。

(2) 論理的配列

これは、文と文が原因/結果、一般/具体例などの意味的、論理的関係をもっている場合である。その関係はThereforeとか、For exampleなどの連結語句(connectives)で明示されている場合もあるが、それを欠く場合もある。後者の場合、連結語句が明示されていないのは、それがなくとも文と文のつながりが明白であるとか、文体論的な目的で省略されているというような理由によるものであろう。指導にあたっては、2つの文の関連が理解しにくい所とか、特に重要だと思われる箇所には適当な連結語句を補わせるというような方法がすでにとられていると思う。また、前者の場合には英語の連結語句が示す論理的関係を正しく生徒に理解させることが大切になってくる。そのためには日英両語の連結語句を対照言語学的に考察し、その共通部分、異なる部分を明確にするような研究が必要だと思われる。たとえば、田中(⑦:75)は永野賢が日本語接続詞の用法を7種類に分類したものを紹介しているが、この7種類がQuirk and Greenbaumによる13種類の英語連結語句の分類(⑥:287-294)といかに対応しているのか、興味深い問題である。

4. 教材研究

以上述べてきたことが実際に教科書を指導する際にどのように生かせるのであろうか、New Horizon English Readers 1の文章を例にとってその可能性を探りたい。

[教材例 1]

- (1) The great sun has sunk to rest, and in his place have come the gentle moon and thousand of twinkling stars.
- (2) But again the sun rises, shines and sets. (3) Again he is followed by the moon and the stars. (4) Man's first lesson in time has now been learned: the light he calls day, the darkness night.

(5) Of all the heavenly bodies, the moon is the only one that seems to change its form and size. (6) At one time it is a mere crescent, at another it is a full circle. (7) Man counts the days from new moon to new moon, or from full moon to full moon, and calls the period a month. (8) This is the second step in counting time.

(New horizon English Readers 1, p. 52)

この例文では、特に指示的要因が形成している文脈に注意して観察する。まず第1文においては his が人間以外の物、太陽を指していることが大切である。同様に第3文の he も太陽を指すが、第4文の he は man の代名詞ととらねば意味をなさない。また第2, 3文で again が繰り返されていることから、第1, 2, 3文は1つのセットになって天体の運行の繰り返しを描写していることに注意させねばならない。特に、第3文の、'he is followed by the moon and the stars' が第1文の 'in his place have come the gentle moon and thousand of twinkling stars' とほぼ同義であることを、第3文の again を参考にして気付かせる。第4文ではコロンが man's first lesson の内容の説明に使われているのに注意させると同時に、反復を避けるため he calls が省略されていることも指摘されるべきであろう。第5文では all the heavenly bodies や one の指すものが明らかにされねばならず、第6文では one-another という慣用表現に注意を向ける。第7文では the period の内容がつかめなくてはいけない。第8文では this の内容を問うことによって第2パラグラフの理解をチェックし、また the second step が第1パラグラフ第4文の first lesson と対比させられていることに注目させ、全体の構成をも把握できるように指導しなければならないと思う。

〔教材例 2〕

(1) Train journeys in England are not usually very long. (2) When I left Newhaven early one morning last year, I thought I could be home in Liverpool by teatime. (3) I had been spending my holidays in America and France, and I had had a wonderful journey. (4) I had traveled thousands of miles by car, train, plane and bus. (5) It seemed that England was very small and very green. (6) I had had my luggage looked at by the officials of my own country, I had got a corner seat in a compartment and I was on my way home.

(New Horizon English Readers 1, p. 43)

これはアメリカとフランスに旅行してイギリスへ帰って来た著者の文章の冒頭の部分である。この例文では配列的要因による文脈を観察してみる。まず時間的配列をみると、全体の中で第1文のみが現在形で書かれており、この文だけが現在の著者の感想を述べていることに気がつく。次の第2文は過去形になっており、話は昨年 Newhaven から Liverpool (いずれもイギリスの町の名)へ帰る途中のことにさかのぼることに注意する。第5文も過去形だが、これはその途中での作者の感想であることを意味する。また第6文の最後、and 以下も過去形になっているので、'on my way home' というのがやはり Newhaven から Liverpool への帰り道のことであり、アメリカやフランスからイギリスへの帰途ではないことを指摘する。さて、第3, 4文は過去完了形が使われているので、過去のある時点における回想が述べられていることになる。最も留意すべきは第6文の過去完了形で、これは第3, 4文の過去完了形とは時間的にずれている。すなわち、'the officials of my own country' が示すように、ここはイギリスに着いてからの話で、Liverpool への家路につく前にどんなことがあったのかを示す過去完了形なのである。つまり出来事は古い順に、アメリカ・フランス旅行→ Liverpool へ帰る前の手続→車中での感想→現在の感想という順序になっている。このことは板書などをして確認した方がよいであろう。次に論理的配列をみると、第1文で、イギリスを汽車で旅行するにはさほど時間がかからないと概説的に述べ、第2文でその例をあげている。第3, 4文ではそのような感想をもつに致った理由が述べられ、その結果、第5文のように考えるようになる。第5文は第1文と似かよった内容を繰り返している

といえる。ここで一応、旅行にかかる時間といった話題は切れて、第6文では家路につくまでの手続きなどが述べられている。

以上、指示的要因や配列的要因をヒントにして、文と文の関連をつかみ、話のすじを追っていくという作業の具体例を出してみた。指導にあたっては、上に述べたことを適切な発問によって理解させ、生徒がうまく文脈に沿って読めるように導いていかなければならないと思う。

5. おわりに：これからの課題

最後に、今後残されていると思われる課題を2, 3述べてみたい。まず、前に触れたように、連結語句に関して日英対照言語学的な基礎研究がなされてもよいのではないかと思う。次に、教授者ではなく学習者からみて難しいと感じられる文章が文脈に関連しているとすれば（たとえば時間的配列の説明で少し述べたように）、その原因は何にあるのかも考えていかなければならないであろう。また、本稿では文脈を形成する要因を2つに大別したのだが、これら以外にも考えられる大きな要因があるかもしれない。最後に、文脈の問題は英語教育のみならず国語教育においても重視されていると思われる分野であり、共通部分も多いと思われる。したがって、国語教育における概念も参考にして考えていくべき問題であると思う。

〔注〕

- (1) 文脈の定義については、国語教育の観点から田中（⑦：16-20）に詳しい解説がある。
- (2) 久野 障（⑤：209, 217）は古いインフォメーションと anaphoric（文脈指示）は区別されるべきだと主張している。
- (3) これらの例文は Van Dijk（②：104）に指唆を受けて創作したものである。

〔参考文献〕

- ① Chapman, Raymond (1973) *Linguistics and Literature: An introduction to literary stylistics*, Edward Arnold.
- ② Van Dijk, Teun A (1977) *Text and Context: Explorations in the semantics and pragmatics of discourse*, Longman.
- ③ 石井正之助ほか8名(1976) *New Horizon English Readers 1* (revised edition), 東京書籍
- ④ 垣田直巳（編）(1978) 『英語指導法ハンドブック ②授業類形編』大修館
- ⑤ 久野 障(1973) 『日本文法研究』大修館
- ⑥ Quirk, Randolph and Sidney Greenbaum (1973) *A University Grammar of English*, Longman.
- ⑦ 田中久直 (1971) 『文脈指導』明治図書